

Title	銅鼓に関する二三の安南資料(二)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.160(342)- 160(342)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

銅鼓に関する二三の安南資料 (二)

この中銅鼓山に就ては他書にも記載多く明命十四年(一八三三)版の皇越地輿誌にも

銅鼓山在安定縣丹泥社、山神最靈、李太宗征占城、軍于長洲泊宿、山神現夢請從立功、迨捷歸太宗命京城立廟、及太宗即位、復托夢告以三王謀反事、至難平詔爲天下主盟神封王爵。

とある。

ゴルーベフ氏が銅鼓山神の銅鼓の實測結果を極東學院年報三十三卷第一冊三四五—三四九頁に發表され、中に阮光盤が一八〇一年に刻した木牌の銘の譯文を紹介し、一八〇〇年に水邊で發見された此銅鼓を彼が翌年命じて山神に奉獻さしめたことを述べられてゐるが之は群書參考に引かれた西山の賊の時銅鼓が一端盜まれました復歸して來たことを指すのであらう。阮がその當時里人が舊傳を忘却してゐたといふのはいさゝか怪しい。また藍山の太廟の銅鼓に就ては鸚言詩集の謁藍京殿偶成中に次の如く云つてをる。

又有銅鼓、毎年國醜日始舉、唯富阴一族、世爲鼓史、餘人舉者輒死、

銅鼓が安南人の間にも靈物として考へられ、かつ祭器であつたことが窺はれる。(松本信廣)